



# ねぎの香り

東京都・会社員

和泉 美香

「仕事中、駅のそばやに入った。「…はい、月見そばね〜お待ちどうさま〜」割り箸が止まる。「今、こんな温かいものを食べたら申し訳ない…」

あの日私の故郷は大きなす黒い波と屍に溢れていた。行方不明者欄に多くの親戚、友人、家族の名前が次々あがっていく。揺れの最中に「だ・い・じ・よ・う・ぶ・はは」

このメールが最後、連絡は途絶えた。10日後強引に現地に入った。町は土煙と今まで嗅いだ事のない臭いが漂っていた。母はおじの家に身を寄せていた。怪我をして歩けないでいた。「今ここから出ないと助けられないんだよ!!また津波がきても一人で逃げられなくなるよ!みんなもう限界なんだからっ!!」母をおぶって鬼の形相でバスに乗せた。花巻空港に着いた。あとは羽田に飛ぶだけだ。

おなかが鳴った。「ママ何か食べる?」「うん、おなかへったね…」ざるそばと盛岡冷麺を半分こした。いつもの喉ごしなんかより胃袋に一気に入り込む!!あく何日ぶりのまともな食事だろう。

大盛りのそばをすすりながら、母はまた泣き出した。「もう泣くんじゃない!!」昔、何か食べている時見つめてくれていたのは母だったのに、…私は全身に力を込めてしまっていた。せつかく生きていたのだもの、親子こうして一緒にそば食べなくちゃ、ね。さあ搭乗口に行こか。一步一步ゆっくり進む。ねぎの跡味が今ごろ鼻をかすめる。母の後に立つ。ずいぶんと小さくなってしまった。

奨励賞